
からっぽ

ハローウルマ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
からっぽ

【Nコード】
N3564E

【作者名】
ハローウルマ

【あらすじ】
私は消えた子供のかわりに男を抱く。よく訪ねてくる幼馴染が女の子と一緒にのをみて嫉妬するが、自分の彼への思いに気付く。彼を受け入れることで母との思いが消える話です。

子供の代わりに男を抱く。私の赤ちゃんは三ヶ月で泡となって消えたのです。血の塊となり掻き出される、泡状奇胎というもの。男は獐猛トウモウに求めて雄叫びをあげながら私の中で果てる。愛しているわけでもない一夜のむづごと。

満たされた翌日は気分も好い。休日だし部屋でゆっくりしたい。だけれど冷蔵庫におかずとなるようなものがなく、たまには外食でしようと思う。

「成美ナルミさん。いますかー」

間のびした声は巨ワタル。ひとつ下の幼馴染で、犬のようにまとわりつくけれど嫌いではない。

「まだ朝よ」

玄関のドアを開けると幼いころから見慣れた男お多福顔。私は困った顔を作るが半分笑顔なのも自分でわかる。彼に会うと頬の筋肉がどうしても緩みます。

「近くに来たから。成人式のお礼をしたくてな」

彼は男お多福顔をなおさら崩した笑顔で言う。

「別にいいわよ。ちよつと出ようか」

男を部屋へ簡単に迎えることはできない。一年半前に胞状奇胎の治療を終えてから、彼が訪ねてきたら近くの公園で少しばかり話すことにしている。鍵とハンドバッグを手に外へ。彼は私の事情も知っている。

行きちゃった婚を決めていたけれど、夫予定者にほかで産ませた子供がいて、その女は養育費だとかを私にも要求する。それに関係もまだ続いているようす。

義母になるはずの人も泡状奇胎だとわかると妊娠してないからと結婚に反対みたいな顔をする。ちよつとした財産持ちで変なプライドもあるらしい。母と呼ぶのに抵抗もあり、私の居場所ではないと別れたのです。

亘は理由をつけてたまに訪ねて来て元気付ける。

(わかっていけるけどさー)

心でため息を吐く。好意を持っているのは気づいているけれど深く付き合う気がしない。

「一昨日も集まったんだ」

ベンチに座り亘が話すのは地区の若者でしているボーリングのこと。妊娠前は私も参加して成績ならかなり良い。

「ご無沙汰してるし。なんか疲れるのよね」

皆と一緒に玉を転がすのも飽きている。

「顔を見せるだけでもいいよ。来月、日にちは成美さんに合わせると言ってた」

「君はまわし者か」

皆に頼まれて誘いに来たとしたら不満。だけれど、お人好しでこんな役もするのは彼の良いところでもあるし、そんなに怒ってもない。

「そうじゃなくて。兄が結婚する話をしただろ。嫁さんも一緒に来るから成美さんに会わせたいんだよ」

「式にも参加するけどね。どんな人」

私も亘の兄を知っているし興味がある。

「尻に敷かれそうだよ」

気の強い女性と笑顔で言う。陰気で我の強いタイプではないらしく姉御肌みたい。

「それもあるけど。ただな」

彼は少し戸惑う。話題を代えるのに不器用なのは幼いころからそのまま。

「うん。なーに」

理解のある優しい口調で訊く。私としてもお喋りを快く感じている。

「成美さんも自分を大切にしたいのだよ」

真面目に言う。はっきりしないのが欠点だが、彼に言わせる壺なら心得ている。

「ちゃんとしなさい。なにがなの」

叱るようだけれど、ちゃんとする、というのは友達と話すときの彼の口癖なのです。

「うん。なんとというか。男の人と遊ぶのはよしたほうが」

「関係ないわよ。あんたに」

最後まで聞かない。無神経で言葉も選ばない男なんだよ。狭い町だから確かに噂もされているはず。自業自得だが他人に言われたくない。

「でも。ほら、成美さんはもつと」

「しつこいわね」

立ち上がる。食事は一緒にしようと思ったけれど、止めることにします。

「なんで怒るの。ぼく、悪いこと言ったか」

この鈍感男との思いで視線だけ投げつけて後ろにする。謝るようなことを喋るが、振り向いてあげない。目が潤んできて顔が強張る。私は泣いているのか。なぜかしらないが顔を見せたくない。子宮の空洞に充満する異物を感じる。

（ばかなんだから）

心で呟くと異物は微かに熱を帯びます。私のことを一番身近で気遣う存在ではあるのです。

私も病院へ通う間に同じ境遇の女たちと会い、旦那や家族など支えてくれる存在を見てきた。赤ちゃんの父だった男と別れ、家族にも妊娠したときからへんに意地を張り、自分のことは心配させないと決めている。それで表向きは大丈夫と強がる。

近いうちに妊娠しても良いと医者から許可が出る。しかし、いつ

も子宮はなにかを求めていた。だから空っぽの子宮が欲するままに母となり私は男を抱く。

妊娠しても良いと許可が出た。泡状奇胎で発生する癌みたいな細胞はまったくないと判断されたわけです。ただ相手はいないし、今日も行きずりの快楽を求める。子宮の入口を広げられた痛さは、消えた胎児への思いと一緒にいまも私の中に疼く。この手からするりと逃げて天使になった子供をひと時でも忘れない。

「いまからの」

車の助手席で私はつまらないと口を尖らせる。ホテルへ行く金をいまから引き出すと、ショッピングセンターの駐車場に停めて彼が建物の中へ入る。カーセックスでもかまわないけれど男にも拘りがあるようだし、焦らすのも手口なんでしょう。

「これは置いといていいから」

亘の声が運転席側の外で聞こえた。見ると誰かと一緒に車から降りたところ。派手なスカートにブラウスの女が親しそう。

「かわいいもん」

甘ったるい声。知り合いでしょうか、同じ地区なら私も顔は知っているはずだが見覚えもない。

(なにを親しそうに、いちゃいちゃと)

女が気軽に亘の肩をたたいてはしゃぐのに心は騒ぐ。恋人がいるはずもないし、見つけたのかしら。昨日も夕方、苺を持ってきたけれど女の友達ができた素振りもなかったのです。

二人とすれ違いで今日の相手が戻ってくる。

「お待たせ。仲のいいカップルだぜ」

「私たちもよ」

そのように思い込む。顔の整ったいい男だけれど、なにやら色あせてみえだします。車が走る、後ろを振り向いたが亘はいない。当

たり前かと心で苦笑い。

ホテルでの男は紳士の野獣になる。私の身体は崩れて行くけれど、なぜか亘と一緒にいた女が頭に浮かぶ。彼女もあらわな身体を横たえて愛撫を受けるのでしょうか。まだ幼い顔で高校生ともみえます。未熟な腰をくねらせて眉間に眉を寄せるのかしら。相手は亘かもしれない。覚めた心が性愛の炎を消して行く。

声を出してみる。そうすればいつものように快感の波は訪れてくるはず。亘を想像する。女を愛するとき男お多福顔はどうなるのでしょうか。

目を閉じる。少なくとも亘の声は心地好い。男の背中を抱きながら、亘の声を聴く。高まるなかで現実は心の中。泡となって消えた子供を忘れるひと時が訪れる。そう、相手はだれでもいい。この寂寥感を埋めてくれるなら。

エクスタシーを感じない交接はしないほうがいい。昨日がそうです。かといって毎日まぐあうわけにも行かない。たそがれる街角。大きな穴が心に開いている。なにかが抜け落ちて男を抱く気にもなれない。こんなとき話相手は亘。携帯電話を取り彼の番号を押したが、すぐに止める。

(原因は亘だった)

心が嘆く。また鈍感男からかけられても困るし、電源も切りシヨルダーバッグに収める。

(自分ではいい男とと思っているのかしら。女心もわからないばかりが)

それならなぜいまも思いだしてると言われても答えられない。

(亘にはいいところもあるんだから。私は似合わないのよ)

どこからか聞こえた。それはも一人の私かもしれない。女はいつも心の奥に別の自分を住まわしている。彼女は知っているのかもし

れない、私の中で亘の存在がどれほど大きいか。いまごろから気づく。幼馴染みだし今更との思いもある。いままで彼に甘えていた部分もあったのです。

(若い子だったから、騙されないように)

歓迎してあげると開き直る。どこかで夕食を食べて帰ろう。

レストランから出るとすっかり暗い。明かりのない自分の部屋へ一歩一歩階段をのぼる足が重い。

「遅いよー」

亘です。玄関の前に立っている。

「なんで。なぜ。電話すれば」

前に駆け寄り言う。嬉しい気もするが表情も感情も思いについて行けない。

「電話しただろ。慌ててきたんだが。取らないから」

「あ。切ってた」

笑ってごまかす。なるほど彼はベルトもしないズボンにシャツのボタンをかけ違えている。中へ入ってからと招き入れた。

ちゃぶ台を前に、なにがあっただ、と訊く彼に答えは準備されてない。知りたいのがひとつだけ。

「彼女ができたんだ。紹介してよ」

「いないよ。また急にどうして」

「知ってる。若い子でしょ。まだ高校生じゃないの」

それに彼はにやける。男お多福顔ではあまり表情も変わらないけれど長年見ていればわかる。

「どこで見たのかな。ほら。兄の嫁さんの」

「うそ。若すぎない」

「違うよ。嫁さんの妹。ぼくの義妹になるのかな」

私はほころびる頬をひき締めるのに苦労する。それには気付かない彼だがどうか。気付かないふりだったりして。

「ぼくは成美さんだけと言ったよ。前に」

「いつよ。聞いてないわ」

ちよつと身を乗り出す。はしたないかな。でも心と行動が今日は一致している。

「小学生のとき」

「あー。卒業式の日」

私が中学校にあがるとき、愛しているとか。変に真面目な顔で言っただのを思いだす。

「時効だー。そんなの。ちゃんとして」

なぜか心が華やぐ。

「恥ずかしいよ。なんだ。あ……いや。なんといえば」

あ、だけで十分。思い続けてくれていたのです。

「いいんだから。最後まで言わなくても。ねえ。信じていいの、いまも」

昨日の女が義妹も言い訳なのか判断できないけれど、ここに亘は居る。子宮が暖かいので満たされて埋まる。心地好く疼いてくる。

彼はお腹を大袈裟にこする。

「腹が減って。成美さんは食べたか」

待っていたんだずっと。私が食べているときもここで。

「なにか作るから」

キッチンに立ちます。食事はさせてから彼をこのまま帰したくない。

彼の愛し方は不器用だが心の奥までとろけさせる。どこかで赤ん坊の泣き声があったけれど、遠ざかって行く。私の心にあった名残でしょう。さよなら私の子供。今日から母を止めることができる。

女の喜びをかみしめて私は男に抱かれた。

(後書き)

えっと、あとがきです。この話は十八禁投稿を書き換えたものでして、テーマは母性。いろいろな意見もございましてうけれど、母性がうるまの話を作る基本です。これに懲りないでまた縁がありましたらお目にかかりましょう。うるま

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3564e/>

からっぽ

2010年10月15日23時16分発行